

近年、人工知能分野の発展により、IBM や Google などの IT 企業を中心に、様々な領域での AI 技術応用が検討されている。IOT や深層学習、自然言語生成など、数々の研究者がこれまでに研究を続けてきた最新の研究成果が反映され、昔では考えられなかったシステムが社会にもたらされることが予想される。具体的には、記事の自動生成、AI を内蔵したドローンによる荷物の運送、最適な治療方法の提案などが目立った事例として挙げられる。これまでは人の手によってなされてきたサービスを、AI がより迅速かつ正確に遂行する。そういった世界がそう遠くない未来に訪れつつある。

そのような日常の到来について考えた際、多くの人々が懸念するであろう事項は、人間の社会的立場だ。あらゆるものが AI にとって代わられたその時、人間は社会で不必要な存在に 成り下がるのではないだろうか。AI が身近になる未来が近づくにつれ、人々の中で自身のアイデンティティへの信頼は揺らいでいくことになる。

そこで、改めて問われるべきなのは、人の強みとは何かである。AI にはない、人間の十八番と言える特徴を再認識することで、今後の社会における自分たちのスタンスを新たに確立するきっかけを得られるはずだ。その問題について検討した際、まず真っ先に浮かぶのが「創造性」だろう。だが、一見人間の特権と思えるそれは残念ながら、先に述べたような技術によって徐々に侵されつつあるのだ。その一つの例は、「人工知能が描いた猫」である。2012 年、Google とスタンフォード大学の協同研究において、ディープラーニングを使用した人工知能が自力で猫の画像を描き出したという研究成果が発表された。これは約 1000 万本の動画から無作為に抽出した画像を読み取らせることで学習した結果によるものだが、AI は「猫」の概念を事前に教わっていない。つまり、与えられた無数のデータから自らその概念を一から創り出したのである。以上の事例を踏まえると、創造性は人間だけが有していると主張することは近いうちに困難になるかもしれない。

では、創造性以外で人間だけが有すると言える特徴はないのだろうか。この問題に対する絶対的かつ普遍的な答えを提示するのは困難なことに違いない。だが、それでも自分なりの答えを出すとするならば、「知識」とであると自分は答える。自分のその回答を誰かが聞いた時、「知識など、コンピュータネットワークと深いつながりを持つ AI がそれこそ得意とする領域であろう。」という反論が返ってくることは想像に難くない。しかし、AI が有する知識は人の持つ知識とは性質が異なるもので、そして人の知識は AI のそれにはない役割を果たしているのではないか。その考えについて、そう考える根拠と共に、以降で少し説明していくことにする。

まず、知識とは何かについてである。大辞泉では、解説のひとつとして、「知ること。認識・理解すること。また、ある事柄などについて、知っている内容。」とある。これは知識の一般的な定義であると言える。基本的に、一つの知識につき一つの意味という一対一の対応がそこには存在する。この「ある事柄について、知っている内容」が知識というならば、それは AI も当然有しているものだ。さらに、その情報量は人間一人が保有するそれよりも

遙かに膨大であると想定される。すると、単純な量を基準に判断した場合、人の知識は AI に劣っているという結論になるだろう。だが、人の持つ知識は量だけでその価値を判断できるものではない。先と同じく大辞泉には、もう一つの定義が載っている。それは、「考える働き。知恵」である。この知恵こそが人の持つ知識の特性を明確に表しており、かつ AI の有する知識にはない側面を示していると自分は考える。知恵とは、人間の生活に根付き、人生の中で徐々に培っていく情報だ。つまり、人の経験に常に寄り添った情報ともいえる。そのため、一つの経験の際に知覚した様々なイメージ、感情、そして実感が伴っている。そうした追加の情報と共に混ざり合った結果、言葉の上では同一とされる知識に無数の意味合いを成立させることが可能となり、かつ個人個人で異なった、独自性が形成されることとなるのだ。情報に命を吹き込む、その付加価値こそが人間の知識の特質すべき点である。考える。人一人が持つ一冊の百科事典は、膨大な情報量を誇る AI の大図書館でも所蔵がない貴重な稀覯本なのではないだろうか。

人の経験に根付いたその特性があるがために、知識は、人の精神において、AI のそれにはない、ある役割を担っている。それは思考に形を与えることだ。人の思考それ自体は本質的には何にも縛られることはない。だが、それらは非常に曖昧で感覚に近く、こちらから何もしなければ思考は霧散してしまう。したがって、思考の内容を把握し、それを我が物にしたければ、曖昧模糊としたそれを自分たちが知覚できるようにする必要がある。そこで利用されるのが知識である。経験に裏打ちされ、かつ慣れ親しんだ知識による肉付けがあって初めて、思考は形を獲得し、自分たちは自身が何を考えているのかを知ることができる。（自分が今書いているこの内容も、こうして文章にしようとしたおかげで自覚することができる。）つまり、脳内言語である知識を共通言語として、人々は自身の思考との意思疎通が可能となるのである。そうして思考に形を与えることで、扱うにあたっての自由度が増す。その結果、思考を一つのピースとして、さらに大きな創造に用いることが可能となる。また、先に述べたように、各人の知識はそれぞれ独自のものとなっている。したがって、思考の解釈の仕方にも人によって様々であると考えられる。つまり、自分独自の思想や価値観、そして世界観を形成していくことができるのだ。したがって、知識は人間の精神の土台を造るのに不可欠であり、自分が確固とした一歩を踏み出すための後ろ盾であるのではないか、そう自分は考えている。

さらに、そうした形を与えるという人の知識の役割は、さらに別の結果ももたらす。それは他者との思考の共有である。自身の思考を認識し、その内容が自身にとって理路整然としていることで、人々はその思考を他者に伝えることができる。それを経て、思考は相手と共有され、既に持っている知識によって解釈がなされ、新たな血肉となっていく。そうして、個人を超えた思考のネットワークが形成されることで、人の精神独自の世界は広がりを見せることになる。これは、単一の意味しか持たない知識の共有だけでは決して達成すること

のできないものだ。人の思考の形成、共有、解釈、以上の各工程に決まったやり方は存在しない。その結果として生まれるばらつきが、新たな思考を生み出すきっかけとなるのだ。ある意味でいい加減なその性質が人と AI との差異を生み出すのに一役買っていることを思うと、それは中々に興味深いことであると自分は感じる。

以上のように、人の知識は単なる知識にとどまらない。それは一つの単位となって、個人個人に独自の世界を提示し、自分たちを常に魅了してくれる存在なのである。それこそが AI にはない自分たちだけがもつ特権であり、何よりかけがえのない楽しみなのではないだろうか。ただ、これまで自分が話題にしてきた AI は「弱い AI」、つまり自我を持たない AI で、現段階ではその部類に属する AI しか開発のめどが立っていない。しかし、自我を有するとされる「強い AI」が遠い未来に生み出された場合、先の専売特許も失われることとなるだろう。その時は AI を良き隣人と認め、先の権利を共有して、自分たちの思考のネットワークに招き入れることがさらなる人類の発展につながるのではないか、そう自分は夢想しつつ、ここで筆を擱くことにする。